

サビエル生誕五百年



巡礼の道

258

藤屋 侃士  
(下松市幸ヶ丘)

## 現代の殉教者・コルベ神父(中)

長崎巡礼(1)

一八九四年一月八日、コルベ神父はポーランドに生まれる。私も一月八日生まれ、誕生日が同じということだけで親しみを感じる

と同時に、自分と四十六年しか離れていない現代の殉教者に畏敬の念を持つ。コルベ神父はこの世に四十七年間しか生きていないの

に。

第二次世界大戦でポーランドはナチス・ドイツに占領される。カトリックの神父であることを隠さなかったコルベ神父はナチスに政治犯として捕らえられ、アウシュビッツ強制収容所に入れられる。

この収容所では大戦が終わるまでの五年間に百万人が殺されるが、コルベ神父は妻子ある死刑囚の男性の身代わりとなり、薬殺された。

今回、長崎の聖コルベ記念館を訪れるまで、コルベ神父が他人の身代わりで殺されたこと以外はほとんど何

も知らなかった。コルベ神父が生きた四十七年間のヨーロッパは第一次世界大戦、第二次世界大戦が起こるなど混沌とした時代である。

信仰篤い母親の影響を受け、二十四歳で司祭になったコルベ神父はアシジの聖フランシスコと同じように清貧の生活の中で「汚れた聖母の心」をもって日々を行動する人間が必要だという確信のもと、機関誌「聖母の騎士」を出版して賛同者を増やす。

一番多い時は「聖母の騎士」を一カ月に百万部発行し、彼が創立したニエボカラノ修道院には七百人を超える修道士(ブラザー)がいた。

ポーランドでの活動が軌道に乗ると東洋への宣教を思い立ち、長崎に来たのは一九三〇年(昭和五年)のことである。そして日本語版の「聖母の騎士」発刊にとりかかり、一カ

月後には発行されたという。なお「聖母の騎士」は今も月に一回発行されている。

さらにコルベ神父は日本での布教のために日本人の司祭・修道者の養成が一番だと考え、小神学校の建設に着手する。昭和十一年に開校し、最盛時は百二十余人余の神学生がいたという。

現在は神学生希望ではない子供にも開放された「聖母の騎士高等学校」となり、建物は修道院のすぐ近くにある。以前は中学校もあつたが、子供が少なくなつて現在は休校中だが、小学校は別の場所にあるなど学校教育にも力を入れている。

コルベ神父は小神学校創立後、会議と肺病治療のためポーランドに帰国、その後、ナチスに捕らえられて殺され、結局、日本の活動は六年間であった。コルベ神父といえは「身代わりの死」だけを連想しがちだが、彼

は祖国ポーランドにニエボカラノ修道院を創立し、武器を持つのではなく聖母の愛の心で行動する人間を育てるという布教・宣教活動をしている。

死に様はその人の生き様の表れと言われ、コルベ神父の身代わりの死は聖母の心を

通してキリストの愛を伝えた。今でもニエボカラノ修道院ではたくさん聖母の心を持って生活し、一つの町を形成している。

私にはそこがコルベ神父の目指した理想郷のように思えるのである。



長崎・聖母の騎士修道院、印刷所、記念館、高等学校―長崎駅の東約三キロの彦山のふもとにある

聖母の騎士

SEIBO NO KISHI CATHOLIC MONTHLY

2



今も毎月発行されている

「聖母の騎士」